

小説「津軽」の中の大雨

～1943 年（昭和 18 年）8 月 13 日の金木の大雨～

1 はじめに

小説「津軽」は、昭和 19 年 11 月に刊行された太宰治の自伝的な小説で、昭和 19 年に太宰が津軽地方を旅し¹、執筆されました。また、津軽の七つの雪が冒頭に紹介されていることでも有名です。

過去に青森ゆきだよりの話題として七つの雪を取り上げたことがあります。今回は、小説「津軽」に出てくる昭和 18 年 8 月の金木の大雨を紹介します。

2 小説「津軽」で紹介されている金木の大雨

小説の中で太宰は金木の生家に立ち寄り、兄夫婦・姪の陽子とそのお嬢さん・私とアヤ²の 6 人で、金木から東に約 4 キロ程度の鹿の子ため池まで散策にでます。

そして、

私たちは、アヤに案内されて金木川に沿って森林鉄道の軌道をとくてく歩いた。

（途中省略）

「この辺が、大水の跡です。」アヤは、立ちどまつて説明した。川の附近の田畑数町歩一面に、激戦地の跡もかくやと思はせるほど、巨大の根株や、丸太が散乱してある。その前のとし、私の家の八十八歳の祖母も、とんと経験が無い、と言つてあるほどの大洪水がこの金木町を襲つたのである。

「この木が、みんな山から流されて来たのです。」と言つて、アヤは悲しさうな顔をした。

「ひどいなあ。」私は汗を拭きながら、「まるで、海のやうだつたらうね。」

「海のやうでした。」

（太宰治 津軽より）

と、大雨の翌年になっても大きな被害跡が残り、また、88 歳の祖母でも経験したことがないほどの大雨だったことが紹介されています。

この大雨による金木の大雨は、どのような大雨だったのか、気象台の資料室で、古い記録簿（地上天気図と降水量月原簿）を調べてみました。

¹ 太宰治の略年譜、太宰ミュージアム、

http://dazai.or.jp/modules/know/index.php?content_id=7

² 『アヤ、と言つても、女の名前ではない。ぢいや、といふ程の意味である。お父さん、といふ意味にも使はれる。』（小説「津軽」より）

3 昭和 18 年 8 月の金木の大雨

13日9時から14日9時までの金木周辺の24時間降水量を図1に示します。当時の青森県内では、青森測候所などの測候所のほかに、市町村役場などに観測を委託していた区内観測所で観測が行われていました。大雨は13日の夕方から夜にかけて発生し、金木ではわずか半日程度の間で総降水量318ミリの大雨となりました。

図2左の地上天気図に示すように13日18時には中国大陸の華中に台風から変わった低気圧があり、また、本州の南には高気圧、オホーツク海と中国東北区の低気圧を結ぶ前線がゆっくり南下していました。東北地方には、前線に向かって、暖かく湿った空気が流れ込みやすい状況でした。

金木より北の三厩・小泊・平館・蟹田、南の鱒ヶ沢・五所川原・浪岡では、いずれも降水量は金木より多くはなく、金木と青森（油川と佃³）の3か所のみで降水量が非常に多くなっています。レーダー観測が行われていない80年近く前ですので、はっきりしたことは分かりませんが、金木周辺の降水量が多くないこと、降水量が多いのが金木・青森（油川）・青森（佃）の西北西から東南東へ直線状の3か所のみであることから、西北西から東南東への走向を持つ「線状降水帯⁴」によってもたらされた大雨かもしれません。

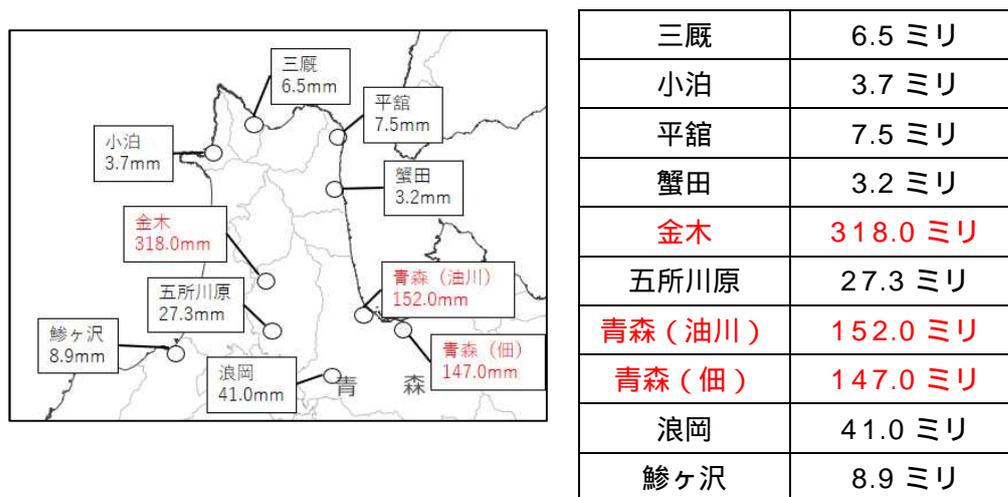


図1 金木周辺の昭和19年8月14日9時までの24時間降水量⁵

³ 1943年当時は、青森測候所は青森市油川と青森市佃（臨時出張所）で観測を実施。

⁴ 次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）が列をなした、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50-300km程度、幅20-50km程度の強い降水をともなう雨域。（気象庁が天気予報等で用いる予報用語より）

⁵ 区内降水量月原簿、青森測候所より

4 近年の良く似た事例 (2013年(平成25年)8月9日の秋田・岩手県での大雨⁶)

近年では、2013年8月9日に、秋田県鹿角で1日の降水量が293ミリとアメダス運用開始の1976年から観測史上1位、第2位の151.5ミリの2倍近い記録的な大雨となり、土石流や床上浸水・床下浸水など大きな被害が発生しています。

この時は、図2右の天気図に示すように、日本の南に高気圧、日本海北部と中国東北区に低気圧があり、南から暖かく湿った空気が入り込み、大気の状態が非常に不安定となったことで大雨となりました。低気圧の位置に違いはありますが、本州の南に高気圧、青森県の北に低気圧があるなど、1943年の金木の大雨と似たような気圧配置です。

また、2013年の鹿角の大雨では「線状降水帯」が発生したことで、同じ場所で雨が降り続け、西北西から東南東の比較的狭い範囲に多雨域が分布していました。降水量が多い地域が狭い範囲で、西北西から東南東に多雨域が分布している特徴も、1943年の金木の大雨と共通しています。

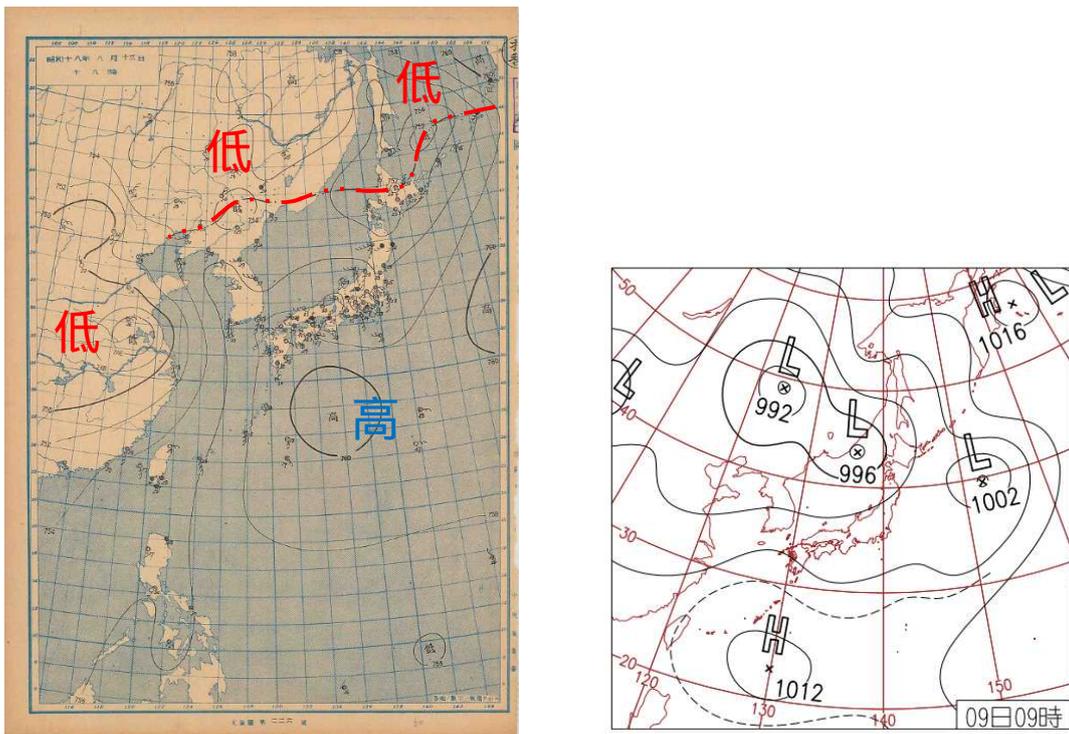


図2 地上天気図

左：1943年8月13日18時、右：2013年8月9日9時

(1943年当時の天気図では、現在と前線の描画方法が異なり、二点鎖線で描かれています。)

⁶ 2013年8月9日の秋田県・岩手県の大雨については、<https://www.mri-jma.go.jp/Topics/H25/press/20130828/press20130828.html> に詳細があります。

5 まとめ

小説「津軽」で紹介されている金木の大雨を調べたところ、金木の区内観測所で 1 日に 318 ミリという大雨があったことが分かりました。また、気圧配置や降水量の分布をみると、2013 年の秋田・岩手県での大雨事例と似た特徴を持っていました。

近年では、青森県は、東北北部の 3 県の中では秋田県や岩手県に比べて、大雨の被害が多くはありません。また、大雨の要因となるような「線状降水帯」の発生頻度も多くはありません。ただ、過去の記録から青森県でも半日に 300 ミリといった大雨の可能性があることが分かりました。

大雨の発生は防ぐことができませんが、適切に避難を実施することで、大雨による人的被害を少なくすることはできます。周囲の状況や市町村から発表される避難勧告などの情報に留意し、気象台が発表する気象情報や注意報・警報などを十分に活用し、早めの避難を心がけていただきたいと思います。

(補足)

・ 青森での記録

1943 年 8 月 13 日の青森の降水量は 152 ミリでした。金木の 318 ミリに比べると半分以下ですが、これでも記録的な大雨でした。2020 年となった今でも、青森の降水量の 2 位や 3 位の記録(表 1)となっており、この時の大雨がいかに記録的であったが分かります。

表 1 1943 年 8 月 13 日の大雨の記録(青森)

	8 月 13 日の記録	順位	統計開始
24 時間降水量 (月最大 24 時間降水量)	152.0 ミリ	3 位	1940 年
1 時間降水量 (日最大 1 時間降水量)	58.1 ミリ	2 位	1937 年

・ 鹿の子ため池

太宰らの散策の目的地は、金木から東へ 5 キロほどの距離の鹿の子ため池でした。今でも青森県道 2 号線沿いに鹿の子ため池があり、小説の中で『溜池のほとりの大きい石碑には、兄の名前も彫り込まれてみた』とされている石碑もため池のそばにあります。近くを通るときは確認してはどうでしょうか。

(この原稿の作成 観測予報管理官 安藤)